



## 今月の好奇心

monthly curiosity

### 生

まれてから死ぬまで、自分と一生を共にする「名前」。本書はその音、つまり語感に宿る力が持ち主にどう作用するかを紐解いた一冊。頭に「え」が付く名前はエレガントな魅力をもたらすし、「な」の音は懐かしい印象を与える……。どの音もそれぞれに素敵な働きがあるというのは驚きだ。

「私たちは何千年も前から言葉を喋っていますから、発音したときに痛くて苦しい音は存在しない。どの音も心地よいのが前提で、発散して気持ちがいいとか、温かく包むようにとか、その種類が違っただけなんです」

そう語る著者の黒川が名前の持つパワーに気付いたきっかけは、「いほこ」という自分の名前だという。

「『いほこ』は発音すると横隔膜が全部上がって結構疲れる音なので、両親が私を叱るときも、名前を呼ぶうちに怒りのボルテージが下がるんですよ。だから、幼心にも得な名前だなんて(笑)。弟が『けんご』で下腹に力が入る対照的な名前なので、小さい頃から名前にもいろんな種類があるんだなと感じていましたね」

数えきれないほどの選択肢から自分に授けられた、たったひとつの名前。それは不思議なことに、その人の持つ命の色合いを強く反映しているとか。「私は、名前は子供が持って生まれてくるものだと思っています。新生児室を

くろかわ・いほこ/感性アナリスト。随筆家。かつて人工知能(AI)の研究開発に従事し、退社後に株式会社感性リサーチを設立。脳機能論を用いた語感分析の第一人者として活躍。「怪獣の名はなぜガキグゲゴなのか」など多くの著書を持つ



若生卓二\*写真

## 黒川伊保子

見ればわかりますが、顔はほとんど同じでも、泣き方や首の傾げ方といったさりげないところに個性が出ている。やっぱりそれぞれ独特の色があるんです。だから『優しい子に育つようこの音を使おう』と恣意的に考えるのではなく、赤ちゃんを見て素直に浮かんだ名前をつけたいんじゃないかな。

でも、もし何も浮かばなくても、気にする必要はありません(笑)。私も息子を産んだときは全然感じませんでしたし……。だけど、みなさん無意識のうちには何かを感じ取って、びったりの名前を付けている気がします」

名前の音を持つ力が、人間関係を作る一要素になるというのも興味深い。「名前の音によって、リードする側とフォローする側や、同じ方向を見る立

03



場など、立ち位置ができることもあるんです。だから名前の語感が持つ意味を知ると、それまでの自分の人生が腑に落ちる。「私の名前はこんなに凛々しい音だったのか。じゃあ、甘えるのが苦手で当然かな」というふうに、今まで感じていたことが氷解して、いっそう人生が愛おしくなると思います」